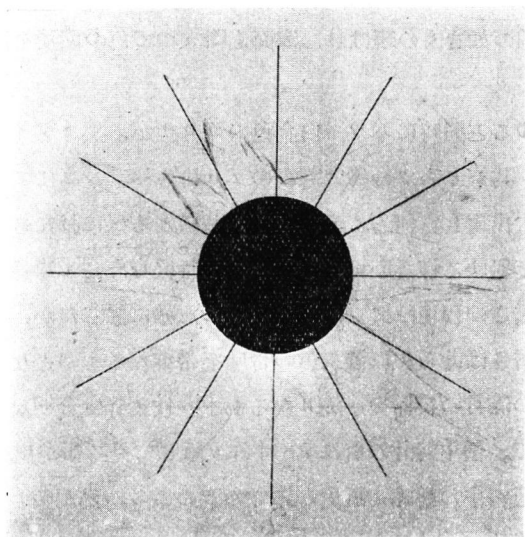


四十年前の日食體驗録

横地 石太郎

別紙日蝕皆既圖は明治20年八月19日午後、石川縣能登國綠剛崎燈臺下に於て私の目撃せし儘を、其當時倉卒に鉛筆を走らして作りたる見取圖にて、何等の参考となるべきものではないのだが、此時の日蝕は本邦に於ては多く降雨又は雲霧の爲妨げられて、充分なる觀測は出来兼ねた様であつた。唯越後



明治二十年（一八八七年）八月十九日 能登綠剛崎
燈臺下に於て日食皆既ノ時ノコロナ及プロチユベ
ランス見取圖（スケッチ）

國南蒲原郡の永明寺山^{ヨウミンジ}へ出張した伊澤修二氏等の一行のみが、充分なる觀測を遂げ得たと云ふ事を聞いたが、綠剛崎に於ても日蝕の前後太陽の附近は一點の雲霧もなく、幸に充分に見る事が出来たのである。

私は當時京都中學校在勤中であつたが、夏期休暇中で金澤へ歸省して居り、急に思ひ立ち綠剛崎へ行き日蝕を見る事にして、同月17日郡役所の在る飯田町に泊り、夕頃舊恩師なる郡長國枝逸樓氏を訪問した時、金澤高等中學校の北條時敬、田中鐵太郎、植原直松、學務課長の檜垣直右等の諸氏も其日同地を通過して同目的の爲、狼煙村に向ふたと聞き、翌日狼煙村へ行つたら、高等中學校の連中は夫々觀測上の分擔を定めて、しきりと豫習をして居たので私も同宿した。

19日は午前より一同燈明臺下の草原に陣取り、時計を見て分秒を報ずる者、寒暖計を見て温度の變化を記す者、コロナを寫す者、プロチュベランスを寫す者等夫々部署に就き、最後の豫習をなし時の至るを待った。桧垣氏と私は日蝕中遊撃隊として自由の行動を取り、一般の景況を觀察する役目となつた。朝の間は可成り曇つて居たが、11時頃より一天晴れ瓦つたのは私等の爲には至幸であつた。

蝕半以上に進みてより、次第に温度の降るを覺へ、皆既少し前に、海上の大氣中に皆既界限線の如きもの現はれ、海面も際立つて色の濃淡を生ずるを見た。

最後の光線が消ゆると同時にパツト白金色のコロナが、黒きディスクの周圍に不規則に顯れ、其ディスクの縁は薄紅のプロチュベランスにて所々彩られ、萬星忽悉として出現し、何とも云へぬ崇美莊嚴なる感に打たれ、動悸昂進し、皮下に躍動を覺ゆる様な心地して、其光景は終身忘るゝ事能はざる底のものであつた。暗さの程度は最初は暗黒となつた様に感じたが、1分2分と経るに従ひ次第に暗さは薄らぎ、濃灰色の青味を帯びたるものとなり、一般の明るさは薄曇りの満月の夜程で、隔りたる樹木の枝葉等は分明ならず、外廓のみを見得る位で、懷中時計の針は7.8寸許り離して見る事が出来た。皆既になる前迄は、叢の中の蟋蟀や近處の鎮守の森の數多の鳥が喧しく鳴いて居つたが、最後の光線が消ゆると同時にビツタリと皆其鳴聲を止めた。燈臺も火を點するを見た。

此時の皆既の時間は3分間餘で短くはあつたが、コロナのスケッチを取るには充分の時があつた。けれども慌てゝ居つた爲に、約1分間位の間に描き上げたので、斯る不完全なものとなつたのは遺憾であつた。

皆既の時には凡ての遊星が地平線上にあり、夫々の位置も豫め調べて置いたのであつたが、僅かに5倍の雙眼鏡のみを持つて居たのと時の不足の爲、火、水、木、金、土の5遊星を見たのみであつたが、金星の如きは最も光度強くして、發光後3.40分間も肉眼で見ることが出来た。

(編者曰ク：本文は既に昭和四年第九卷に添載したものであるが、珍しいと思つたので再び載せることにした。)